自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う

浜寄遺跡発掘調査報告書

２００２年３月

益田市教育委員会

序

益田市は高津川と益田川によって形成された石見地方で最も広い平野を抱え、北は長い海岸線で日本海に面し、背後は中国山地から派生した丘陵に囲まれています。この恵まれた地勢と穏やかな気候により古くから人々が生活していたことを示す多くの遺跡や文化財が市域全体に分布しています。

さて、このたび自動車・携帯電話基地局新設に伴い浜寄遺跡の発掘調査を実施したところ、飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれた遺跡の一端が明らかになりました。万葉の歌人柿本人麿が活躍していた時代の貴重な資料が、しかも人麿の終焉に関わりの深い高津地区で発見されたことにはひときわ感慨深いものがあります。さらに今回は多くの方々に発掘調査の様子を見学していただき、地域の歴史に身近に触れていただくことができました。

本書は発掘調査の概要をまとめたものでありますが、広く活用していただき、地域の歴史や埋蔵文化財の保護に対する理解と関心を深めていただく一助となれば幸いです。

調査にあたってご指導とご助言をいただいた島根県教育委員会及び調査指導の先生方、また終始ご協力をいただいた事業者株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国及び土地所有者、地元自治会をはじめとする地域の皆様、関係各位に厚く感謝申し上げまして、報告書刊行のごあいさつといたします。

平成１４年３月

益田市教育委員会
教育長　田　中　　稔

例　　言

1．本書は平成13年度に益田市教育委員会が株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国から委託を受けて実施した自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報である。調査に要する経費は事業者が全額負担した。

2．調査組織は次のとおりである。

調査主体　益田市教育委員会　教育長　田中　稔
事 務 局　益田市教育委員会文化振興課
調 査 員　木原　光（文化振興課主任主事）
調査指導　島根県教育委員会
　　広島県立美術館学芸課長　　村上　勇
　　島根県立三瓶自然館指導員　中村唯史

3．現地調査及び資料整理期間中には次の方々に多大なご協力とご教示をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略）
今岡一三（島根県埋蔵文化財調査センター）、板倉芳朗（島根県埋蔵文化財調査センター）内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、株式会社ドコモエンジニアリング中国、共同開発有限会社、榊原博英（浜田市教育委員会）、世良勝資（土地所有者）、田原淳史（島根県埋蔵文化財調査センター）、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、浜寄自治会（自治会長　亀山　将）、増野晋次（山口市教育委員会）

4．現地調査、資料整理には次の方々に参加していただいた。
岩本末子、岩本哲夫、大久保眞紀、大谷浪江、大畑和子、岡崎敦子、田中　登、中村康恵、中村　了、深井一雄、藤井典子、柳井友吉、山地喜三男、横山秀美、和崎幸子

5．挿図中の方位は磁北を示している。

6．本書の編集、執筆は木原が行った。

１．調査に至る経過

平成13年７月26日付けで株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国から益田市教育委員会へ高津浜寄地区に計画された自動車・携帯電話基地局新設予定地における埋蔵文化財の確認依頼があった。益田市教育委員会は、平成10・11年度に実施された益田道路建設に伴う分布調査の結果と平成12年度に隣接地で行った益田道路建設に伴う代替地候補地の遺跡確認調査の結果から、予定地は明らかに浜寄遺跡の範囲内に含まれる場所であることを報告し、場所の変更が困難な場合は事前に発掘調査を実施して遺跡の実態を把握する必要があることを説明した。これに対して事業者からは、携帯電話利用者から高津地域における受信状態の改善の要望があり、さらに適地が他になく変更は困難との意向が示された。

これを受けて発掘調査の実施に向けての調整を進め、事業者から８月30日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出された。発掘調査は掘削工事が行われる鉄塔基礎部分を対象とすることとし、10月４日付けで益田市教育委員会から島根県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査通知を提出した。

さらに益田市と事業者との間で平成13年10月５日付けで発掘調査の委託契約を締結し、現地調査は平成13年10月５日から11月５日の間、実働21日間で実施した。

第１図　浜寄遺跡の位置と益田平野の地形分類図

2．遺跡の位置と歴史的な環境

浜寄遺跡は高津地域に形成された広大な砂丘の南側、三角州上の平地に位置する。原始・古代以降の歴史的な背景について高津地域を中心に概観してみると、砂丘上に立地した松ケ丘遺跡では弥生時代前期から中期にかけての土器の他、古式土師器や須恵器も出土し、埋葬遺跡の可能性が考えられている。万葉公園内では弥生時代後期の竪穴住居と奈良～平安時代の遺構が重複するサガリ遺跡や研石横穴などが調査された。さらに石見空港建設に伴い、奈良～平安時代にかけての大溢遺跡や根ノ木田遺跡などが調査された。また最近では石見空港飯田線建設工事に伴い庄屋東遺跡から骨蔵器として使われた奈良時代の須恵器の壺が出土した。

中世の高津郷は荘園長野荘の所領単位のひとつで、平安時代末期には益田（御神本）兼栄・兼高父子が領有していた。弘安の役（1281）の後、鹿足郡に新補された吉見頼行の子長幸は高津に所領を得て高津氏を称し、南北朝時代には高津城（小山城）を拠点に北朝方の益田氏と抗争を続けた。天正19年(1591)の美濃郡益田元祥領検地目録には高津浦屋敷銭船役料との記載がみえ、高津が港湾としての機能を備えていたことがわかる。

1．浜寄遺跡　2．松ケ丘遺跡　3．松崎碑（旧柿本神社推定地）4．柿本神社　5．高津城跡　6．サガリ遺跡　7．鍛フロ遺跡　8．研石横穴　9．庄屋東遺跡　10．根ノ木田遺跡　11．フケ田平遺跡　12．大溢遺跡　13.県史跡七尾城跡　14.古川遺跡　15．県史跡三宅御土居跡　16．片山横穴群　17秋葉山古墳　18．市史跡小丸山古墳　19.三角縁神獣鏡出土地　20．四塚山古墳　21.日赤敷地遺跡　22.市史跡中世今市船着場跡　23.専福寺跡　24.福王寺　25.国史跡スクモ塚古墳　26.高浜古墳群　27.稲積城跡　28.多田横穴群　29.高川城跡　30．北長迫横穴群　31.南長迫横穴群　32．鉈溢遺跡　33.角井城跡　34．大獄城跡　35.安富城跡　36．羽場遺跡　37．安富王子台遺跡

第２図　浜寄遺跡の位置と周辺の遺跡

元和３年(1617)に高津村は津和野藩領となり、代官所が置かれた。藩主亀井氏は松崎にあった柿本神社を延宝９年(1681)に現在地に移転再建した。さらに河港を確保するため高津川の改修をたびたび行うとともに、高津に紙座や蝋座を置いた。宝永四年(1707)には庄屋長嶺嘉左衛門が蟠竜湖から暗渠を掘って沖田平野に水を引き、一帯の新田開発が進んだ。幕末には八本松に異国遠見番所が置かれ、長者原に台場が設けられた。江戸中期に創設された鋳造場（古釜屋）は幕末に藩の大砲製造所となった。

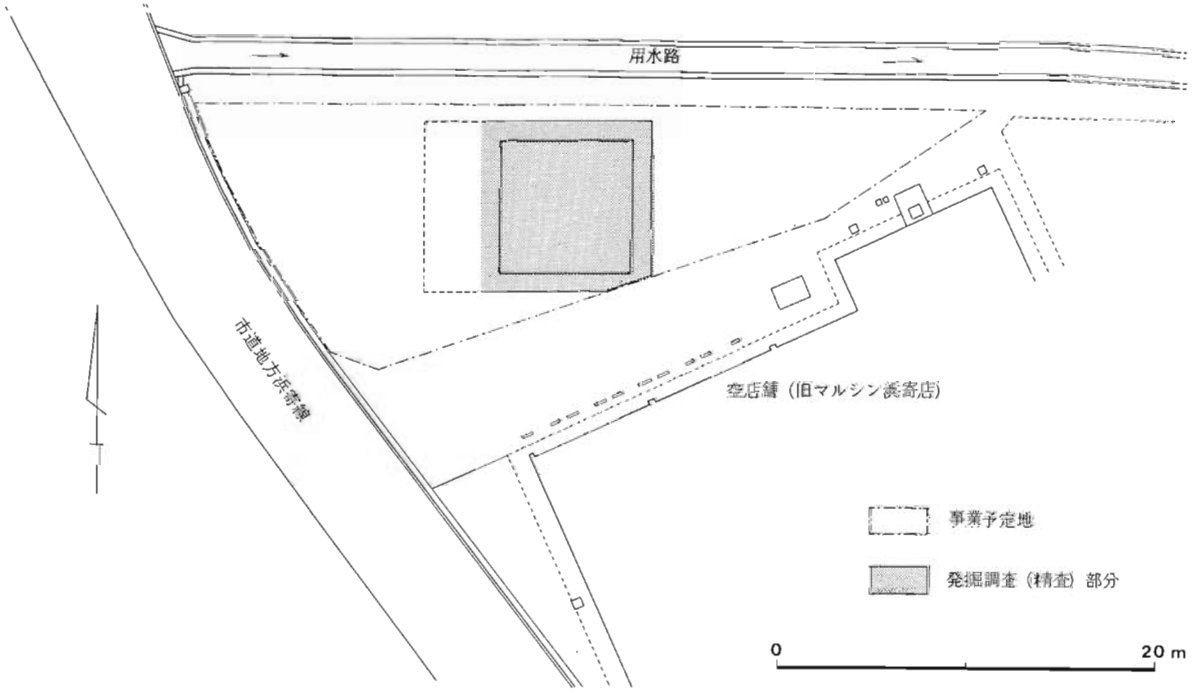
この他、益田市内には三角縁神獣鏡出土地や大元１号墳、スクモ塚古墳、小丸山古墳などの首長墓が益田川右岸側に分布し、中世では七尾城跡や三宅御土居跡など益田氏関連遺跡や寺社が益田地区を中心にまとまって残り、山城跡も広く点在している。

３．発掘調査の概要

調査地は益田市高津３丁目イ551-1に所在する。現況は空店舗の駐車場跡で、地表面の標高は約３ｍである。西側は市道地方浜寄線に面し、沖田の水田地帯が広がる。北側は用水路に接している。この用水路の北側と空店舗の東側は畑として利用され、古代から中世にかけての遺物が広範囲に散布している。

予定地のアスファルトが除去された後、鉄塔基礎部分を中心に、掘削工事の余掘りが及ぶ９ｍ×９ｍの範囲を対象として発掘調査を行った。

発掘面積は全体で118.3㎡だが、当初の調査区設定に誤りがあり、調査の途中で東へ約３ｍ修正したため、精査範囲はこの内の81.0㎡である。なおこの修正で発掘作業を中断した部分は盛土して保護された。



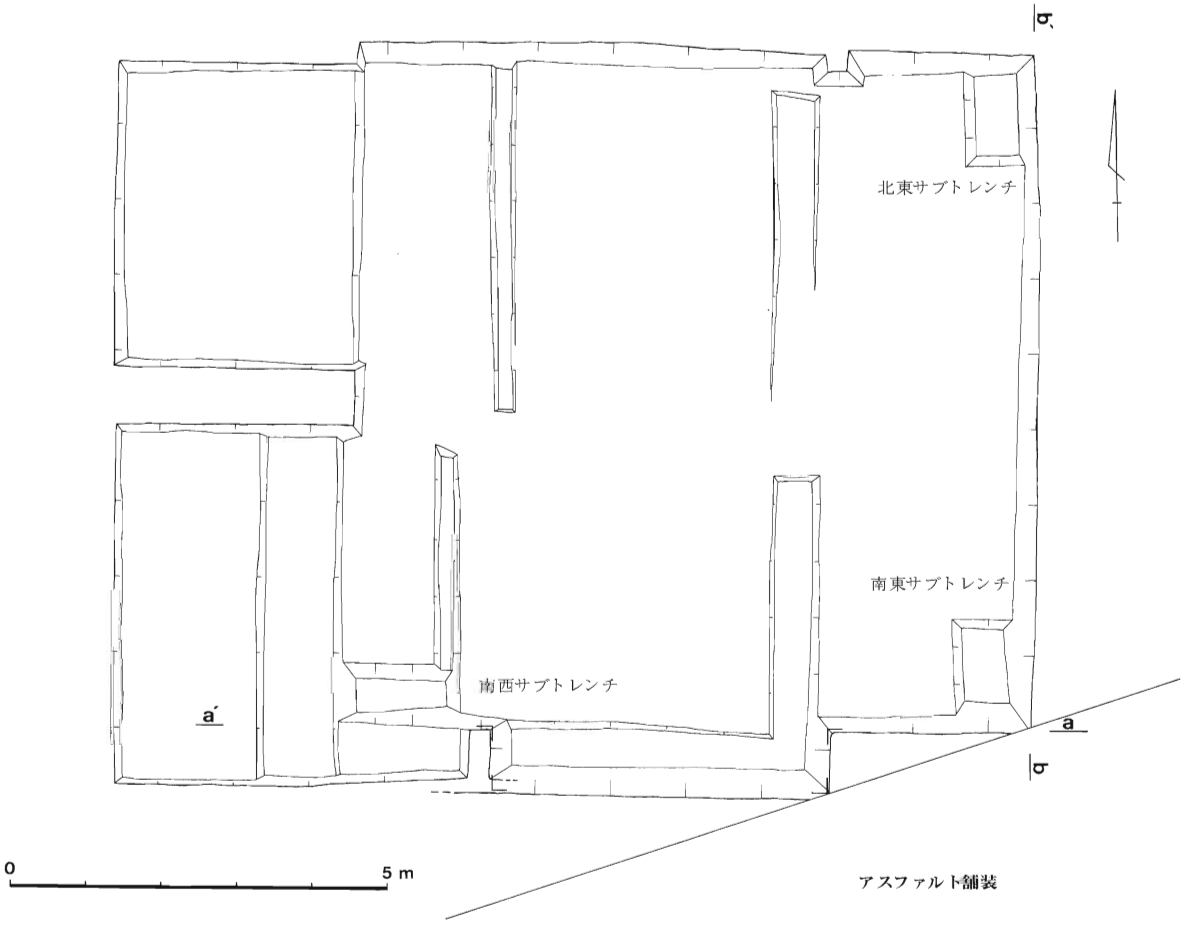
第３図　調査区位置図

10月26日には広島県立美術館村上勇氏の現地指導を受け、調査方法や遺跡の性格、出土遺物についての教示を得た。さらに11月5日には島根県立三瓶自然館中村唯史氏の現地指導を受け、地質学的な見地から土砂の堆積状況と高津川との関連について教示を得た。

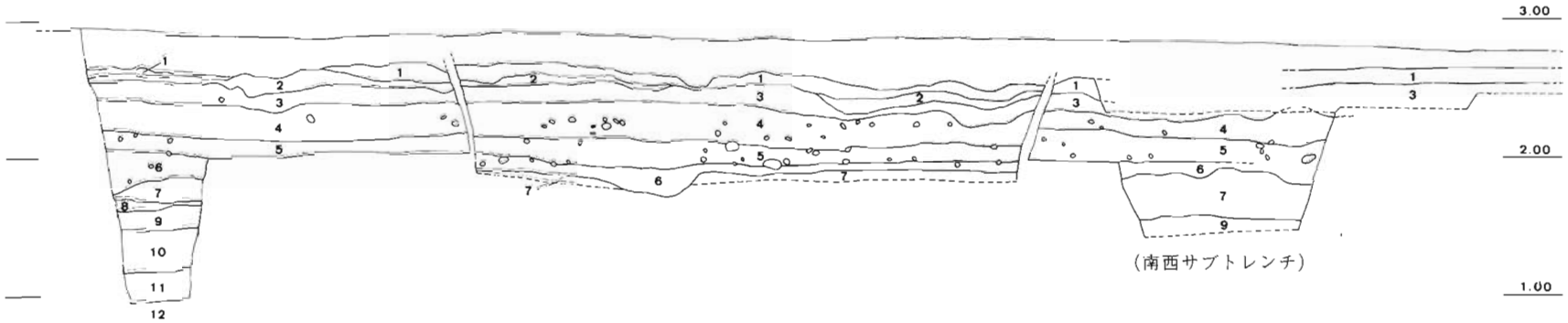
重機で舗装に伴う砕石や埋土を取り除いた段階で水田跡特有の暗黒褐色土が現れた。この旧表土までを重機で除去した後、発掘作業を開始し、堆積土の層位ごとに遺構の有無の確認と遺物の取り上げを行いながら調査を進めた。

層位は上から、かつての水田耕作土と考えられる暗黒褐色土（1層）、水田の床土にあたる暗茶灰褐色土（2層）、茶褐色土（3層）、暗茶褐色土（4層）、暗茶褐色砂質土（5層）、砂礫層（6層）の順に堆積していた。

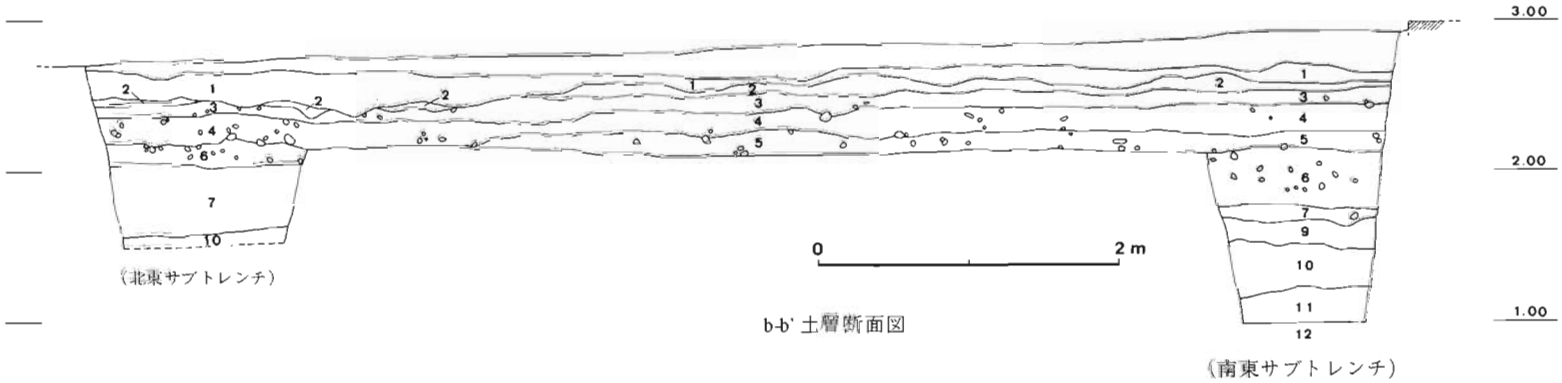
1層からは近現代の陶磁器片とともに須恵器片や中世の白磁、青磁片を採取した。さらに3層から5層にかけて須恵器や土師器が多数出土した。遺物は調査区の全体から出土したが、特に調査区の南東寄りの部分にかけて出土の密度が高くなる傾向があり、中には完形に近いものもあった。この遺物包含層は40cmから所により70cmの厚みがあり、調査区の周囲にさらに広がっていくと考えられた。なお4層と5層には10cm程度以下の礫が非常に多く混じっていた。6層は荒い砂と礫からなる砂礫層で、上層から若干の遺物が出土したものの、全体的には遺物は出土しなくなる。



第4図　調査区平面図



a-a'土層断面図



b-b' 土層断面図

1.暗黒褐色土(旧水田耕作表土)
2.暗茶灰褐色土(旧水田床土)
3.茶褐色土(遺物包含層)
4.暗茶褐色土(遺物包含層)　やや砂混じりで、礫を多く含む。
5.暗茶褐色砂質土(遺物包含層)　砂が多く混じり、礫を多く含む。
6.砂礫層　荒い砂と礫の層で、上層に遺物を若干含む。
7.砂層　非常に細かい砂。
8.砂混じり暗茶灰褐色粘質土
9.暗茶灰褐色粘質土
10.明茶灰褐色粘質土
11.砂層　非常に細かい砂。
12.砂礫層　細かい砂と10cm 以下の礫が層くしまる。

第5図　土層断面図

この間、段階的に精査を行ったが、結果的に遺構を確認することはできなかった。

全体的に6層上層までの発掘を行った後、さらに下層の土砂の堆積状況を確認するため調査区の南東隅、北東隅、南西隅の3箇所にサブトレンチを設けて部分的に掘り下げた。

南東サブトレンチでは砂礫層より下は、砂層（7層）、砂混じり暗茶灰褐色粘質土（8層）、暗茶灰褐色粘質土（9層）、明茶灰褐色粘質土（10層）、非常に細かい砂（11層）、細かい砂と10cm以下の礫が堅くしまった砂礫層（12層）へと変化していた。12層上面の標高は約1mである。

北東サブトレンチでは、厚み40cmから50cmの砂（7層）が堆積し、その下は暗茶灰褐色粘質土（9層）と続き、南西サブトレンチも同じような状況であった。

このことから、高津川の大規模な洪水によって砂礫が運ばれ（12層）、水位が下がるにつれて砂、泥土の順で沈殿、堆積（9層から11層）した様子が読み取れる。9層と10層の粘質土から、一帯が当分の間湿地であったことがわかり、植物の根に鉄分が沈着した痕跡が観察できた。7層はその後の洪水によって一時期に堆積した砂で、この時には当地は礫を運ぶ本流の直撃は受けずに、砂のみが運ばれてくる場所に変化していた。南東サブトレンチで7層が厚く堆積していなかった点については、当時のこの場所における微地形の影響を反映していると思われる。

発掘後全景(西から)

４．出土遺物

遺物としては縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、白磁、青磁、土錘、鉄滓、銅銭などが出土し、その総量はコンテナ５箱分であった。出土の位置や層位に特に言及していないものはすべて遺物包含層の３層から５層にかけて出土した。

縄文土器（第６図１）は南西サブトレンチの６層から出土した。沈線で区画された内側に縄文が残る磨消縄文で、後期前半に比定される福田KⅡ式の特徴をもつ。なお、この部分の６層は礫を含まず、ほとんど砂の状態であった。

弥生土器（第６図２，３）には甕の頸部と底部があった。

須恵器は坏蓋、坏身、高坏、甕、瑤、長頸壺などが出土した。

坏蓋（第６図４～18）のうち、４～６は乳頭状の小さなつまみをもち、内側にかえりが付く。７～９はボタン状のつまみをもち、内側にはやや退化した小さなかえりが付く。10～12は輪状つまみである。端部の特徴としては、13・14は小さく折り曲げ、15は外側に開き気味に大きく折っている。14にはボタン状のつまみが付く。さらに16～18のように端部の内側が屈曲するものがある。16は端面がほぼ直立し、17は端面が外傾気味で、18は特に面をもたずに丸くなっている。このように内側が屈曲する蓋の端部の資料が多く出土している。

坏身（第６図19～31）のうち、19は口径が小さく、高台が付かない。出土量はわずかで、乳頭状つまみの蓋とセットになる坏である。体部から口縁部にかけての形状としては、20のように上外方へ真っ直ぐのびるもの、21のように端部がやや外反するものが多かった。22は体部が内弯気味に立ち上がる。23はやや大型で、内弯気味に立ち上がる体部の途中が屈曲し、口縁部が強く外反している。銅を主体とした合金で作られた佐波理椀を写したものである。

24～29は接地面にくぼみをもつ低い高台で、24～27のように高台の外側や内側に膨らみがあったり、端部を引き出したものと、そのような特徴をもたない28・29がある。体部は高台に近い位置で屈曲し、上方にのびる。30・31は内弯する坏部に高くふんばる高台が付く。高台が付く資料が多く出土したが、32や33のように高台をもたないものもわずかに出土している。

高坏（第７図１～６）のうち、１は口縁が外反する。２は坏部がやや深く、内弯している。３は厚みのある坏部が緩く内弯し、４は浅い坏部の端部を上方へ折り曲げている。５・６は小型の脚部で透かしはない。５は端面が内傾し、６は端面がやや外傾している。

甕（第７図７～12）のうち、７は上外方に真っ直ぐ伸び、端部に平坦面をもち、外面に沈線と刺突文がある。８は体部から強く屈曲して端部が丸く、玉縁状を呈している。９は外反する口縁の端部を下外へ引き出して、端面が外傾する。10はやや長い口縁で、端部の外側が小さな玉縁状に厚くなる。この他、11は口縁外面に波状文をもち、12は厚い口縁の端部を内側に突起させ、外面にヘラ状工具で斜め方向の格子文と波状文を施している大型の甕である。

瑤は（第７図13）は刺突文が残り、カキメが巡らされている。

長頸壺（第７図14～18）のうち、14は細長い頸部の中位に２本の沈線が巡り、口縁は外反気味に開く。15は大きく開く口縁部である。16と17は平底で、ともに体部のやや上位で肩が丸く張る。16は頸部に２本の沈線があり、頸部の付根に小さな段が付く。18は胴部が直線的にのび、明瞭な稜をもって肩部が強く張り、高台が付く。

土師器には坏、高坏、甕、甑があった。

坏（第８図１～３）のうち、１は口径が小さく、内外面に赤色顔料が塗布されている。２はやや内弯し、３は口縁が上外方にのびる。

高坏（第８図４～８）の４は明瞭な稜をもって坏部が屈曲し、口縁はやや外反しながら開いている。５は坏部外側に不明瞭ながら段が残る。脚部の６は端部が厚く、丸くおさめている。７は外側に折れて長くのび、８は小形で、端部が薄く丸い。

甕（第８図９～18）は単純口縁で、９は端部を外側につまみ出している。10は端部を上外方に細く引き出し、11は丸くおさめる。12の口縁は内弯している。これらの甕は球体に近い胴部をもつと思われる。一方、13～18は口縁部が全体的に厚く、その端部も単純に丸くおさめたもので、細長い胴部をもつと考えられる。13は口縁が緩く屈曲する。14～18は口縁の屈曲部の内側に稜が付き、その中には屈曲部の外側が平坦面状になる17と18がある。18は口縁端部をやや下方に垂らしている。

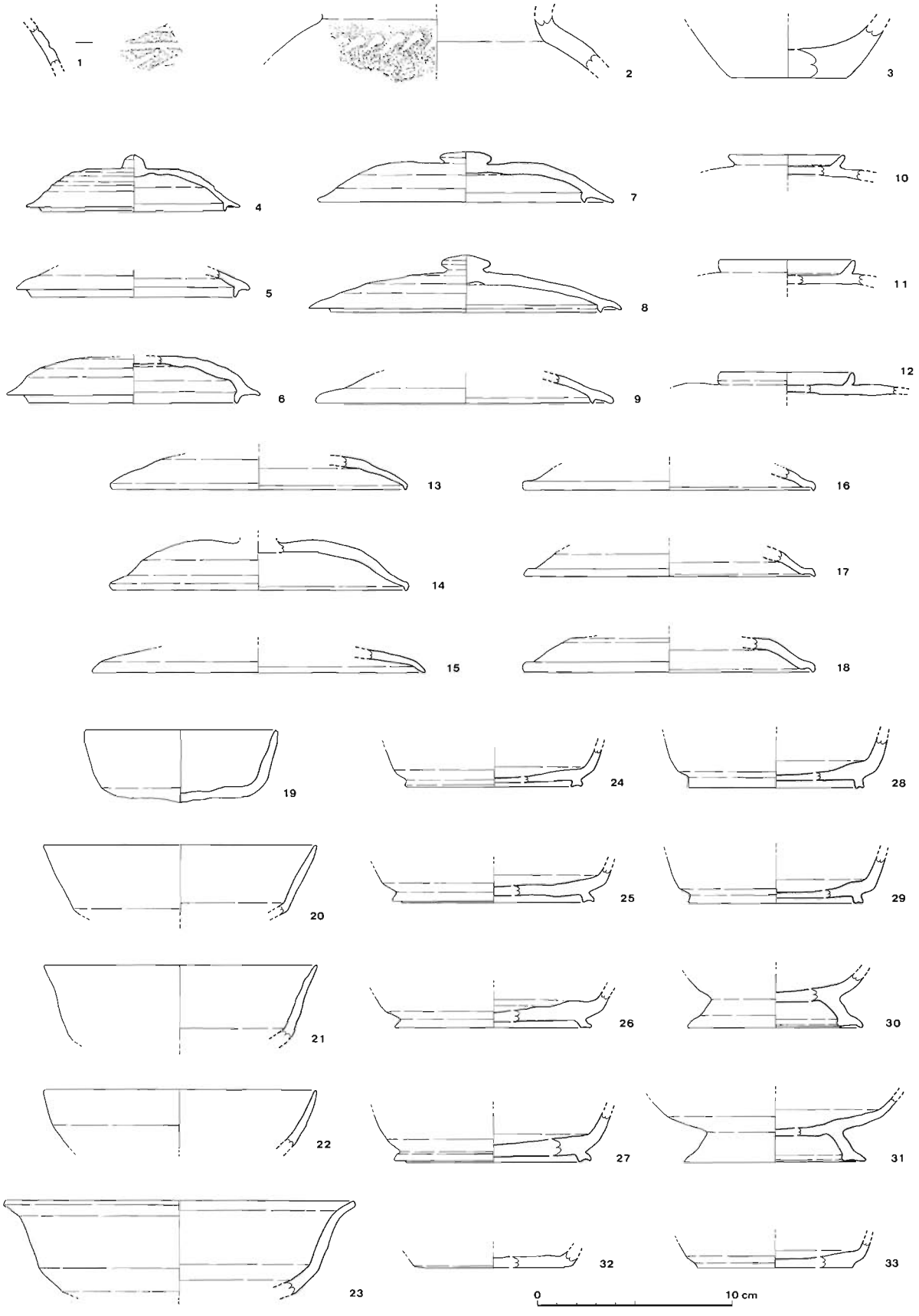
甑（第８図19・20）は取手部分のみを示した。

土錘（第８図21・22）の21は両端が細く、中央が膨らんでいる。22～24はほぼ均一な径の土錘で、それぞれの直径は、22が約1.0cm、23は約1.7cm、24は約2.0cmである。

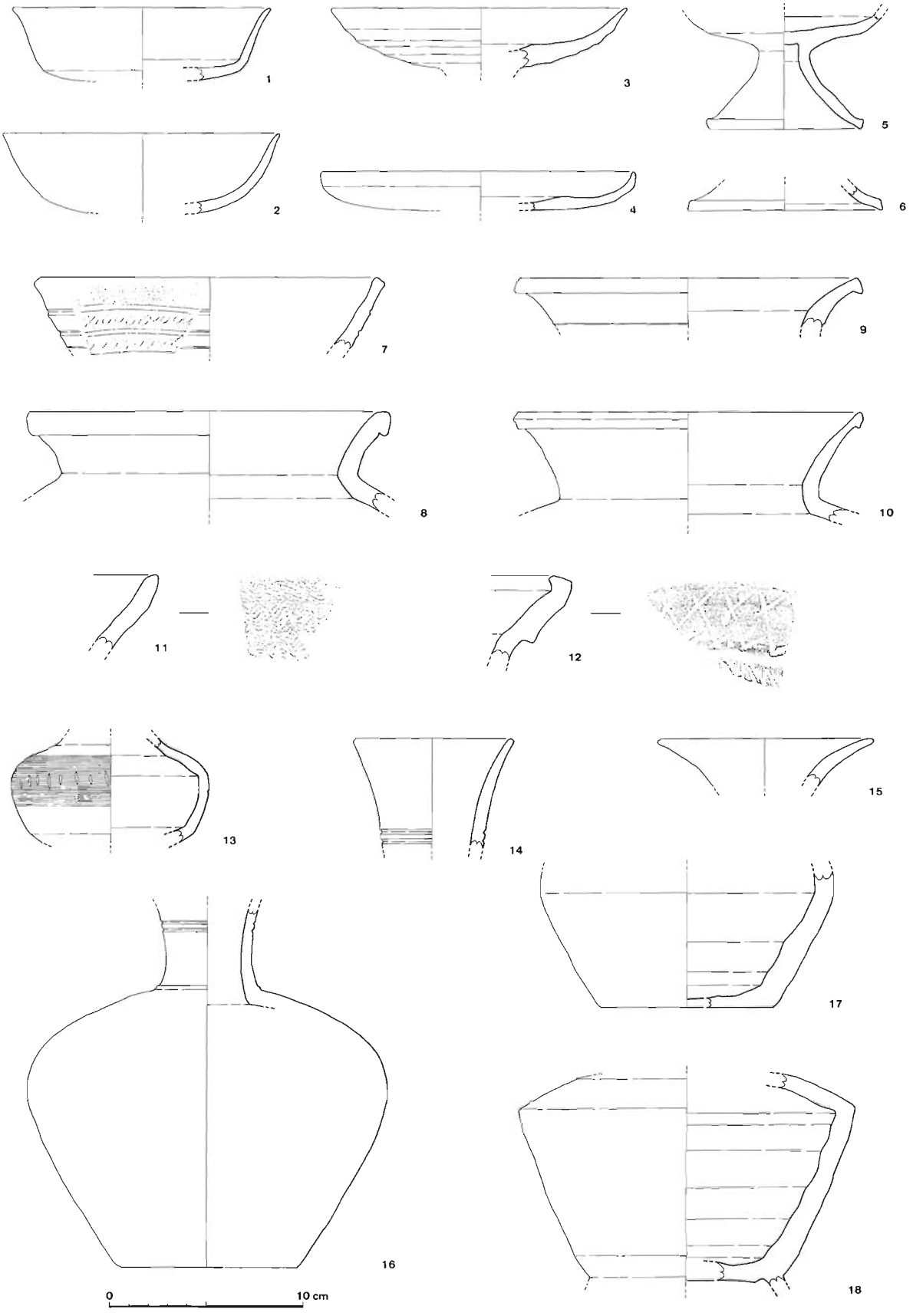
中世陶磁器（第８図25・26）のうち、25は白磁の皿、26は線彫り蓮弁文の青磁碗で、ともに中国製である。

遺物の出土状況(南東から)

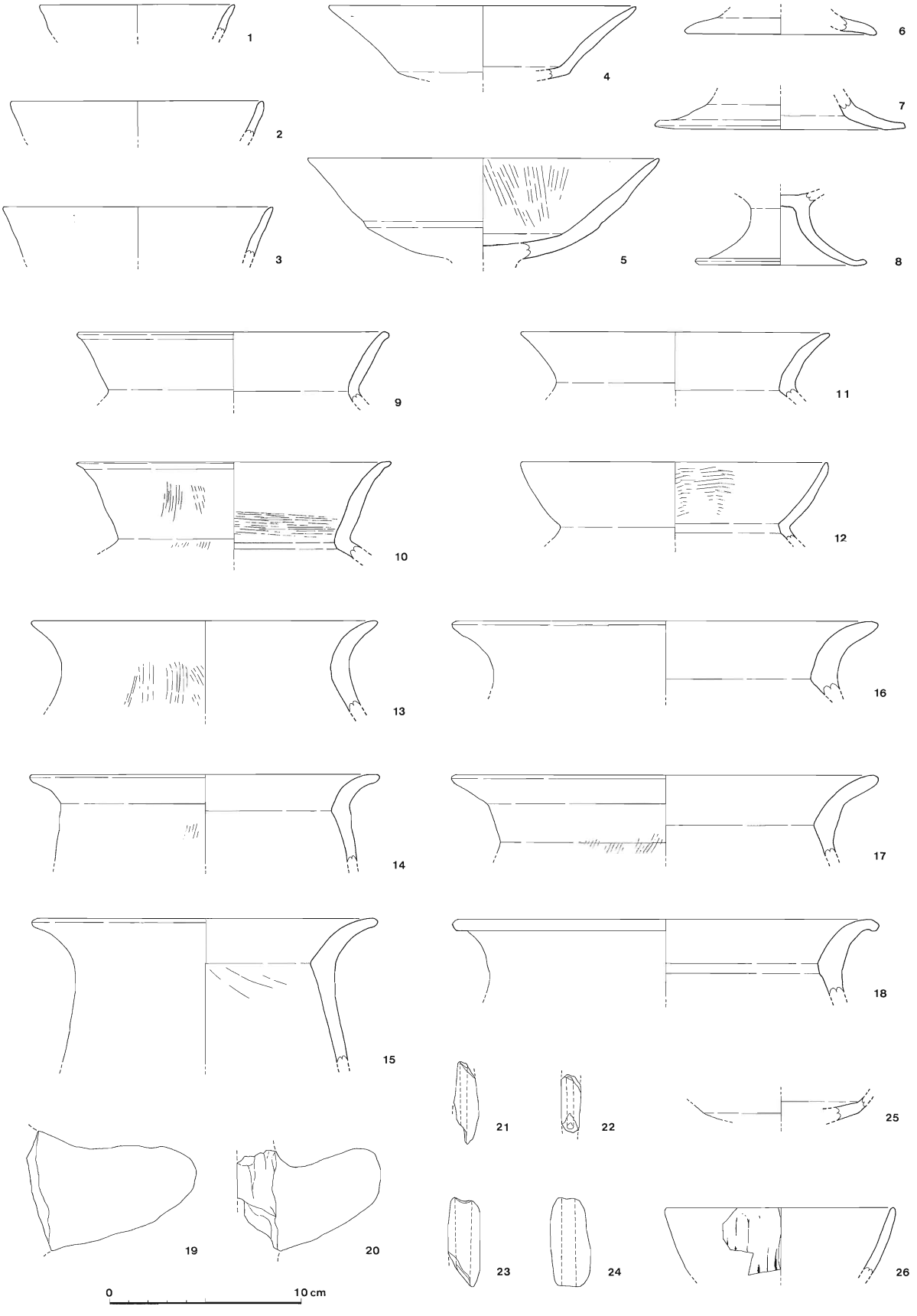
長頸壺の出土状況



第６図　出土遺物実測図（１）



第７図　出土遺物実測図（２）



第８図　出土遺物実測図（３）

5．まとめ

発掘調査の結果、遺構が発見されなかった点については、特に遺構を持たない性格の遺跡である他、洪水などの自然災害あるいは人為的に移動された土砂に遺物が混在した可能性が考えられる。

遺物包含層の上面の標高が約 2.5m と低く、当時の海水面や今回の調査で明らかになった高津川の影響による土砂の堆積状況から、調査地一帯は水際に近い場所であったことは確かである。このような水辺には、建物を持たない集いの空間が存在したことも推定できる。

しかし、遺物の出土状態が層序をなさず、また遺物包含層には礫が相当含まれ、これらの礫と土、砂が不規則に混在していた。長期間に徐々に堆積したというよりもむしろ短期間に、一括的に堆積した土砂と観察された。さらに遺物包含層の下層から近世以降の陶磁器片がわずかながら出土している。これらのことから、今回の調査地は、付近に存在する遺跡部分の土砂が遺物とともに人為的に移動され、二次的に堆積した場所と考えられる。

出土遺物は須恵器及び土師器が圧倒的に多かった。土師器の高坏や甕の一部に古相のものが少量含まれているが、大半は７世紀前半から８世紀後半までを中心とする時期と考えられる。なお須恵器の中に焼成温度が低く軟質な、いわゆる生焼状のものが目立った。製品として流通し得ないものが多量に出土したことから、生産地圏内で使用されたと推定され、高津地域に未発見の窯跡が存在する可能性もある。

中世の遺物は 13 世紀の白磁皿、15 世紀末から 16 世紀初めにかけての青磁碗などがわずかに出土したが、一帯には広範囲にわたって中世の遺物が散布している。浜寄遺跡の範囲や時代については幅広く想定しておく必要があり、高津川の流路変遷との関連も重要である。

なお調査期間中、浜寄自治会との共催で10 月 28 日に現地説明会（約40 名参加）を開催し、10 月 30 日には高津小学校（約95 名）と高津中学校（約75名）の見学があった。その他、調査期間中に延べ約130名の方が見学に訪れた。さらに出土品の一部については高津公民館と高津児童館で展示活用された。

高津小学校の見学風景

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はまよりいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	浜 寄 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書
副 書 名	自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	木 原　　光
編 集 機 関	益田市教育委員会文化振興課
所　在　地	〒698-8650　島根県益田市常盤町１番１号
発 行 年 月 日	西暦２００２年３月２９日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜寄遺跡（はまよりいせき）	島根県（しまねけん） 益田市高津（ますだしたかつ） 3丁目（さんちょうめ）	32204	Q 274	34° 40′ 48″	131° 49′ 20″	2001.10 ～ 2001.11	81	鉄塔建設

所収遺跡名	種　類	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
浜寄遺跡	遺物散布地	飛鳥時代 奈良時代 中　世		土師器、須恵器、貿易陶磁器、土錘、鉄滓	土師器及び須恵器が多数出土

自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う

浜 寄 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

平成 14 年 3 月発行

編集・発行　益 田 市 教 育 委 員 会

島根県益田市常盤町１番１号

印　　刷　西 村 印 刷 所

島根県益田市高津六丁目27番8号